

高井田横穴古墳群試掘調査概要報告書

1983. 3

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市には、古代から近代に至る数多くの遺跡が包藏されています。このような遺跡の保護に当る、市の文化財行政も発足以来4年を経過し、徐々にではありますが、郷土の文化財の実体が明らかになってきました。それとともに、市民の皆様の文化財に対する関心も高まっています。

とくに東山一帯は、全国に例を見ないほどの古墳密集地であり、古墳文化の謎を解明するための重要な鍵を握る地域と言えます。また山麓部においても、十数ヶ所の古代寺院や集落跡が間断なく存在しています。

柏原市の市民憲章には、『文化遺産に学ぶ……』ことが唱えられております。一度崩壊した遺跡は二度と蘇るものではありません。また無計画、無秩序な開発は、市民生活を物質的にも、精神的にも無味乾燥なものにして行く事でしょう。わたくしたちは柏原市の過去、現在、さらに将来を考える上で、文化財がいかに重要な役割を果していくかを理解していかなければなりません。そのために、調査による遺跡の解明、あるいは遺跡の保存について総合的な視野に立って考えていく必要があると思われます。

最後に、今回の調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の方々、ならびに調査関係者に対し、深く感謝の意を表します。

昭和58年3月

柏原市教育委員会

1. 調査に至る経過

大阪府柏原市大字高井田地区において、大規模な宅地造成を行なう区画整理事業が計画された。この地区は、生駒山地の南端部に位置し、割合なだらかな丘陵地であり、南側や西側に大和川が流れ、河内平野を一望出来る景観良好な立地や環境が住宅地としての条件に恵まれている。

しかし、当区画整理事業区域には、線刻壁画が描かれた横穴古墳を持つところから史跡指定された高井田古墳群が含まれ、また、河内六大寺の最南端に位置する鳥坂庵寺の寺域および前方後方墳を持つ安堂山古墳群の一画を含む文化財が大変密集した地域である。

文化財が密集しているところから、昭和57年7月28日、区画整理事業組合は、大阪府教育委員会文化財保護課、柏原市都市計画課、同市教育委員会との協議の上で、次の事を決定した。

1. 当区画整理事業区内において、文化財の包蔵状態が明確でない地区があり、どのような種類と規模の遺跡であるかを知るために試掘調査を行う。
2. 試掘調査の結果により調査の方法を決定する。

以上の事を主な課題として、調査は、柏原市教育委員会が主体となり実施する事となった。試掘調査は、昭和57年8月17日から開始し、同月31日に終了した。



図1 高井田横穴古墳群付近図

2. 調査経過

イ. 調査日誌

82. 7. 28 高井田土地区画整理組合、柏原市都市計画課、同市教育委員会社会教育課の三者が試掘調査について協議を行う。
8. 17 試掘調査開始、調査区域の設定とその周辺の下草刈り。
- 19 トレンチ周辺の下草刈り続行。
- 20 同作業終了。伐採後の写真撮影。安堂地区から標高水準点を移動する。
- 21 重機による表土掘削開始。第11トレンチに2本の溝を検出する。同トレンチ西側に横穴式石室を主体部とする古墳が検出される。瓦、埴輪が出土。
- 23 第1～11トレンチの表土の重機による掘削終了。
- 24 表土層を除去したトレンチの精査続行。トレンチ周辺平板実測。トレンチ断面、遺構等の実測。第8トレンチに遺物包含層が検出される。
- 25 各トレンチの精査続行。平板実測。標高水準点の移動。当地区内道路が降雨によって荒廃しており、通学路にあたるため道路側溝の埋土除去等周辺整備を実施。第9トレンチに奈良時代以降の遺物包含層を確認する。
- 26 各トレンチの精査続行。平面図、断面図、平面実測図等の作製。第1、2、3トレンチから土師器、須恵器、瓦等遺物が出土。第4、5、6トレンチから埴輪が出土。第6トレンチから遺物包含層が確認される。
- 28 各トレンチの遺構検出。平板図、断面図、平面実測図等作製。
- 31 重機によるトレンチの埋戻し。試掘調査に関する予定地区における作業終了。



擲図2 調査前 その1



擲図3 調査前 その2



擲図4 伐採中 その1

四、調査方法

試掘調査方法は、トレンチ調査を実施した。トレンチ調査は当区画整理事業のように、調査対象地が広範囲に渡るとき採用する事前の予備調査である。

1. 直線的な長い筋掘りを行う。
2. 遺跡の予想される位置に設定する。
3. トレンチの平面や断面の観察によって、遺構の性格等を確認する。。
4. トレンチ内を層序に従て掘削した土層から出土した遺物により時期や規模を確認する。
5. 試掘調査結果を基礎として、本調査が必要かどうかを決定し、必要であれば、調査方法や調査費用の概算の基礎とする。

等がトレンチ調査の主な内容である。

しかし、トレンチによる試掘調査は、調査面積が少ない事や点在する遺跡である場合には発見されない事が多々あり、工事開始後に遺構や遺物が発見されるという不都合も生じる。

今回の調査においても、古墳という点在する調査対象遺構があるので、これらの事を十分考慮してトレンチ位置を選定した。トレンチ上層は重機により掘削した。その下層より検出された遺構や遺物包含層は、総合的な判断が可能な掘削にとどめ、次期調査を待つ事にし、下層部分の掘削は出来うる限りひかえることとした。

調査期間及び予算面での制約もあり、そのため状況把握出来ない地点があった。その地点においては、踏査及び付近の地元関係者からの聴聞を行い、状況把握の一助に供した。



挿図5 伐採中 その2



挿図6 伐採後



挿図7 周辺整備中



挿図8 表土層の重機による掘削



挿図9 検出遺構
(第5トレンチC)



挿図10 トレンチの埋戻し

ハ. 調査結果

第1トレンチ

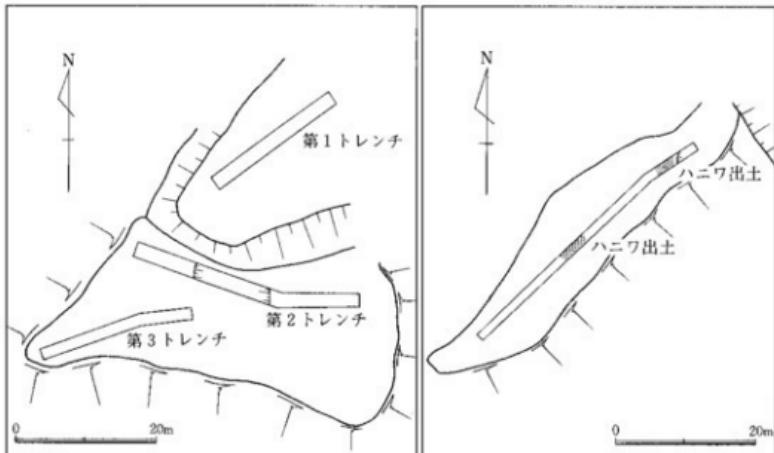
第1トレンチは、南西方向に向かって伸びる丘陵尾根上に設定した。当調査地区内での最高所である。標高は約81mである。トレンチの規模は、幅2.0m、長さ21.0mである。表土の厚さは約20cmあり、その下層に遺物包含層がみられた。包含層の厚さは10cm以上あり、土師器、瓦、サヌカイト片等遺物が出土した。瓦片の出土は、かつてより当地区に普光寺を比定する説があり、その関連性を追求する史料として今後大いにクローズアップされる。遺構は、トレンチ中央部にピット1個を検出した。

第2トレンチ

第1トレンチの南西部で、丘陵屋根筋に造られた段々畑の中に設定したトレンチである。方向はほぼ東西方向である。標高は約79mである。トレンチの規模は、幅2.0m、長さ31.0mである。表土の厚さは約20cmあり、その下層に約20cmの厚さの遺物包含層が確認された。この遺物包含層から土師器や須恵器の細片が出土した。その器形は明確に規定できないが、奈良時代以降の時期に相当する特徴をもつものである。遺構は、トレンチ中間部に幅11mの落ち込みを検出した。性格は不明である。

第3トレンチ

第2トレンチと同一畑内に設定したトレンチである。方向は南西方向である。トレンチの規模は、幅2.0m、長さ21.0mである。遺物包含層は、第2トレンチと同様の状況がみられ、土師器や須恵器の細片が出土した。



挿図11 第1、2、3トレンチ

挿図12 第4トレンチ

第4 トレンチ

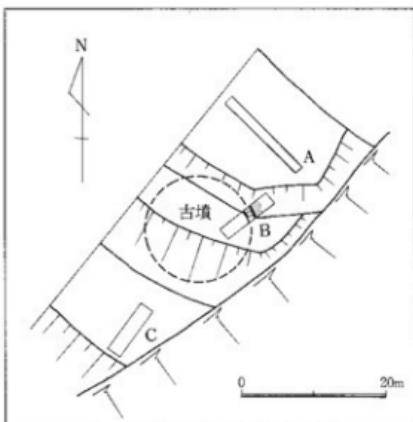
当トレンチは、南西方向に伸びる尾根の南側で、尾根の頂上に近い斜面地にあたり、尾根筋に平行するように設定した。標高は約73.0mである。トレンチの規模は、幅1.0m、長さ40mである。表土は30数cmを測り、遺物包含層がその下層に厚さ40cm～100cmの帯状に確認された。幾分斜面地の堆積土もみられるが、割合良好な包含層である。出土遺物は、埴輪、土師器、須恵器、瓦、磁器等が出土した。埴輪の出土は、トレンチの北東部と中央付近に見られた。埴輪片からみて付近には、5世紀末から6世紀前葉の時期の古墳が存する証左と認められる。その他の遺物は、奈良時代以降のものがほとんどである。

第5 トレンチ

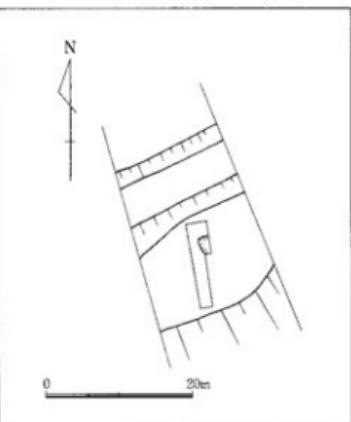
同トレンチは、第1～3トレンチより一段下がった尾根筋上に3ヶ所の小トレンチA、B、Cを設定した。トレンチA、B、Cは、表土厚さ約20cm程度で浅く、直ぐ地山となる。わずかな遺物包含層がみられ、この土層中より埴輪、土師器、須恵器等が出土した。トレンチAから埴輪が出土しており、当トレンチの北側に古墳が存在する。またトレンチBからは、北西方向の幅約2.0mの溝が確認され、その地形からみて古墳の周濠と判断出来る。

第6 トレンチ

尾根筋から少し離れた平坦地に設定した。現状は段々畑として利用されていた場所であるが、まわりは自然地形から察して割合広い平坦地が拡がっているのが認められる。標高は約58mである。トレンチの規模は、幅2.0m×長さ11mである。表土を20～30cm掘り下げた時点できわめて良好な遺物包含層が確認された。出土遺物は、埴輪、土師器、須恵器、瓦器、鉄片等古墳時代から中世に至るまでの時期のものがある。遺構は、トレンチの北側に、1.0×2.0mの方形の



挿図13 第5トレンチA、B、C



挿図14 第6トレンチ

掘方を持つ土塙と約30cm径の円形ピット2個、不明落ち込み等を検出した。遺構の時期については掘削しなかったため出土遺物がなく不明である。

第7トレンチ

尾根筋より南側の斜面地の一画に設定する予定をしていたのであるが、下草が多く生い茂り現在の排棄物を多く散見するところから中止した。

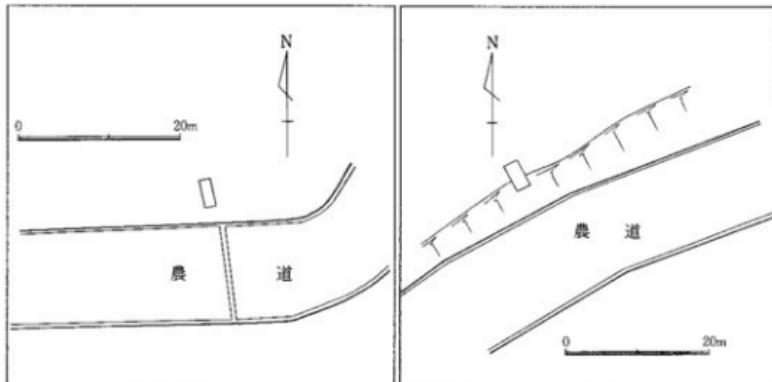
第8トレンチ

トレンチの位置は、丘陵南側の斜面地中腹部の農道を中心としたかなり広い平坦地の東寄りのところで、この農道の直ぐ北側に設定した。標高は約57mである。トレンチの規模は、幅2.0m×長さ3.5mである。出土層位は上層から、表土、黄褐色粘質土、薄茶黃褐色粘質土である。

表土は約10~30cmあり、黄褐色粘質土内から土師器、須恵器等の遺物が出土し、班点状に炭が含まれており注目される。薄茶黃褐色粘質土は、通常集落跡の遺跡で形成される遺物包含層とよく似ている。この土層にも炭が含まれており、上層の土層と同様の遺物の出土を得た。この遺物包含層は、農道の地道の中に多くの雨水の自然流路が形成されており、この溝の断面観察によって拡がりを確認出来る。この観察によると、東側は標高68m位まで、西側は標高50m位まで確認される。

第9トレンチ

当トレンチは、第8トレンチの西側にあたり、農道の北側に設定した。標高は約53mである。トレンチの規模は、幅2.0m×3.5mである。遺物包含層は、黄褐色粘質土、明茶褐色粘質土があり、それぞれの土層の厚さは約40cmある。出土遺物は、土師器、須恵器等がみられた。また、遺物包含層の範囲は、農道に形成している雨水の自然流路の断面で観察されるが、農道の西側は、農道の造成によって削平されており、この部分にも継続していたと思われる。



挿図15 第8トレンチ

挿図16 第9トレンチ

第10トレンチ

当トレンチは、鳥坂寺跡の寺域の東側にあたり、平坦面を成している。当地区は昭和49年度に大阪文化財センターの試掘調査によって多量の瓦等を検出した場所である。標高は約37mである。トレンチの規模は、幅1.5m×長さ17.5mである。盛土及び表土は約60cm厚さを測り、その下層に遺物包含層が検出したが、瓦の出土はなかった。土師器小片が出土したにすぎない。遺構については検出されなかった。

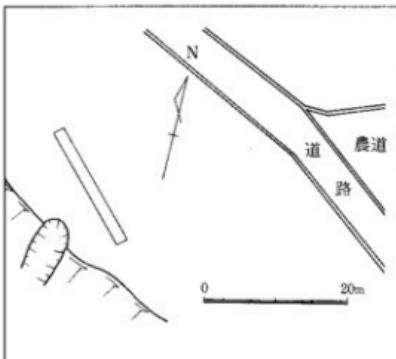
第11トレンチ

第10トレンチの西側で、一段下の畝の中に東西方向のトレンチを設定した。同地区も鳥坂寺跡の寺域内である。標高は約31mである。トレンチの規模は、幅1.5m×長さ30mである。

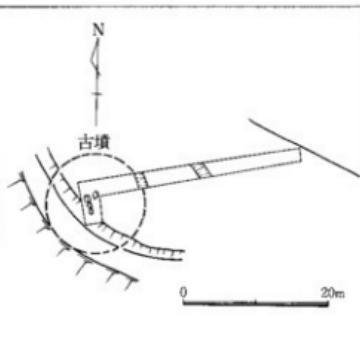
層序は、盛土、表土、黄茶灰色粘質土である。今回はこの土層までの掘削にとどめた。盛土及び表土の厚さは約60cmあり、黄茶灰色粘質土は20m以上厚さである。出土遺物は、埴輪、土師器、須恵器、瓦等が見られた。

遺構は、ほぼ南北方向の溝が2本検出した。中央部で検出した溝は、約1.5m幅あり、溝中に小礫が敷き詰められている。瓦の出土もあり、寺院関係の施設とも考えられる。トレンチ西側寄りに検出した溝は、約1.0m幅あり、溝中より埴輪が出土したため、西側に拡張したところ、古墳の主体部が検出された。この古墳の内部主体は、横穴式石室である。上の方は削平されているが、下段の石列を検出した。

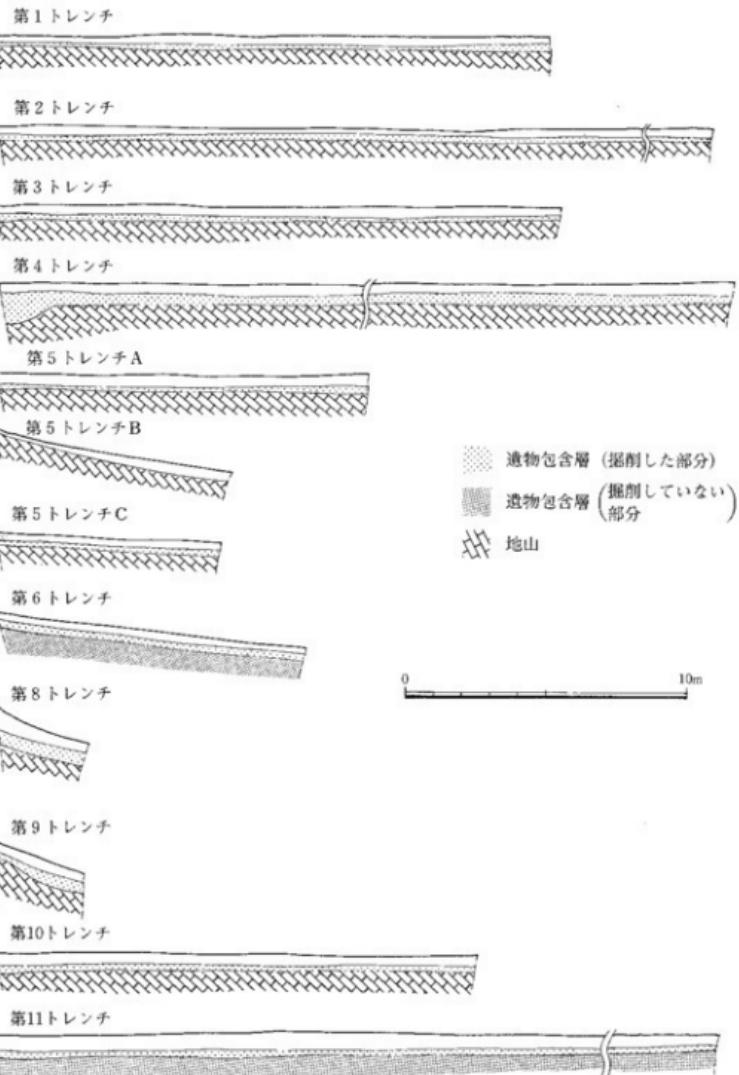
鳥坂寺跡の寺域内にあたる場所で半壊された古墳が発見されたことは、単なる古墳の完明にとどまらず、古墳と寺院とのつながり方や寺院の造営に何らかの糸口がつかめる可能性がある。本調査においては、この点十分留意が必要である。



挿図17 第10トレンチ



挿図18 第11トレンチ



挿図19 トレンチ断面図

4. ま　と　め

今回の試掘調査は、区画整理事業区域内の北部域に亘する地区的遺跡の状態を検証する目的で実施した。その結果についてのまとめと当区画整理事業区域内の問題点を指摘しておきたい。

第4、5、6トレンチにおいて古墳の周濠と埴輪の出土が確認された。この事から、古墳の新規発見総数は計6基である。復元可能なものについては各トレンチ位置図に明らかにした。調査面積が全体の1%未満である事を考慮すると、全体の古墳総数は大幅に増加する事が確実である。

集落については、第4、6、8、9トレンチおよび周辺踏査によって、遺物包含層を確認した。今回の結果により集落の範囲予想図を作製した。集落の時期は奈良時代以降の時代が比定される大集落である。

寺域については、第11トレンチの遺物包含層から瓦の出土を得た。今後の調査のため出来る限り遺物包含層や遺構を保存したが、小礫を敷き詰めた溝も発見されており、寺院と関連した遺構が想定される。

調査結果で若干の説明を加えたが、第1、2、3トレンチにおいても遺物と遺構が発見され、当試掘範囲内における埋蔵文化財の規模や種類の多さをみる限り、全面調査が必要である。

当区画整理事業区域内の問題点として次の2点が述べられる。

1. 横穴墳が掘削される凝灰岩層の分布を地質地図と照合したところ、国指定史跡を含む高井田横穴群の位置する尾根の北半部あるいは向側尾根の南側斜面地に確認される。横穴墳が超過密している状況を見るとこの地域に存在しない理由がない。地質地図中、大阪層群や定ヶ城累層に横穴墳が分布しているが、これは、凝灰岩層の上層にこれらの土層が形成された事を示す。

2. 現在、総数149基の横穴墳が発見されているが、既往の調査の経過と方法を見る限り、分布調査や試掘調査での発見であり、どの地区も全面調査されていない。よって既往の調査の調査範囲内でも新規の横穴墳が発見される可能性が高い。この事はこれまでの調査報告書でも警鐘されてきた事であるが、再度、提起しておきたい。

これらのことから、当区画整理事業内の高井田横穴古墳群の実態を明らかにする段階を経て、はじめて、総合的な保存対策を策定する必要があるものと考えられる。

今回の試掘調査にあたっては、高井田区画整理組合設立準備委員会(代表 谷口俊春)、村本建設株式会社および調査関係者には、文化財に対する深い理解をいただいた。今後将来的にも柏原市文化財行政に対する協力をお願い申し上げたい。

参考文献

白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』第4243合併号 1966。

- 大阪商業大学 「柏原市太平寺古墳群・生津・横尾古墳群実測調査報告」 1970。
- 『柏原市史』 第2巻 本編 I 1973。
- 大阪文化財センター 「大阪府柏原市高井田所在遺跡・試掘調査報告書」 1974。
- 大阪府教育委員会 「平尾山古墳群分布調査概要」 1975。
- 『大阪府史』 第1巻 古代編 I 1978。
- 河内考古刊行会 「河内太平寺古墳群」 1979。
- 大阪府・柏原市教育委員会 「柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書」 1980。
- 大阪府教育委員会 「太平寺古墳群」 大阪府文化財調査報告書第33編 1980。

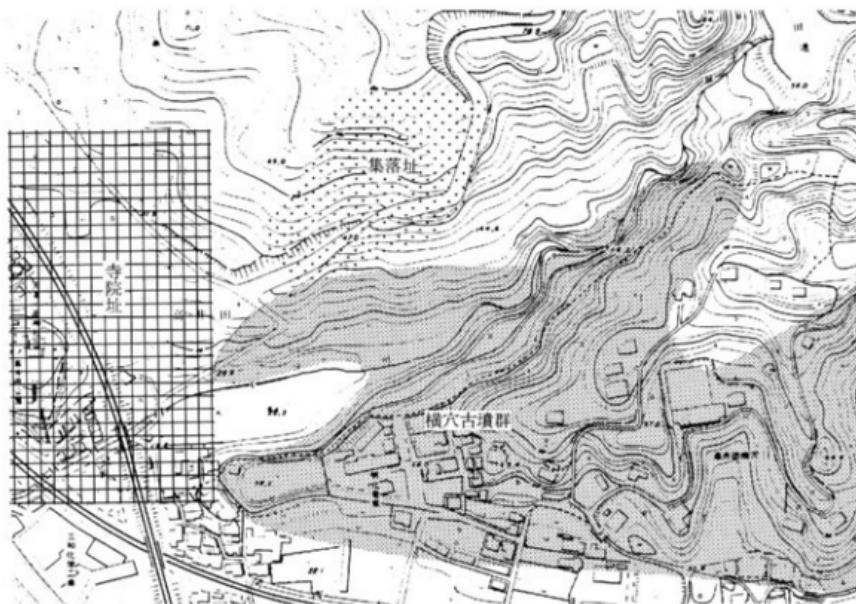
図 版



トレンチ位置図



調査区地質図



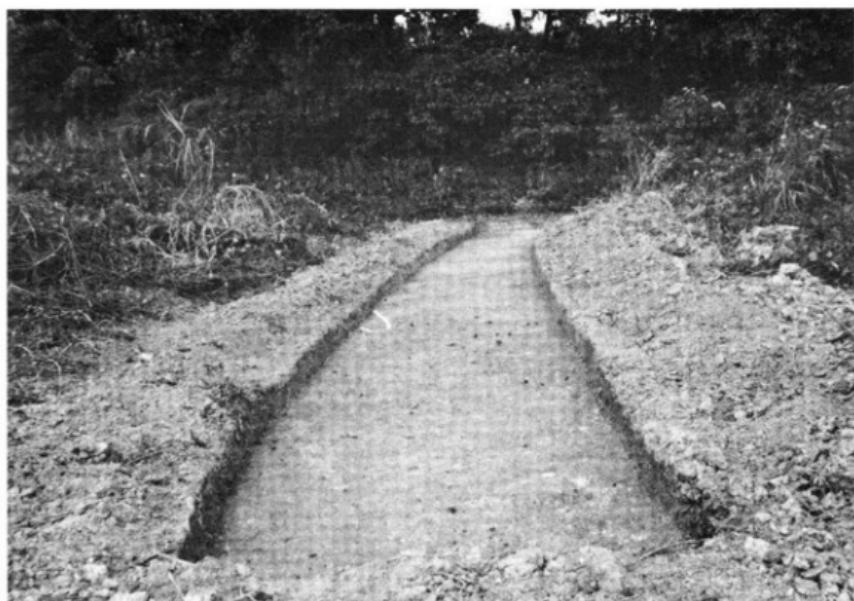
調査区遺跡状況予想図



高井田古墳群（西側からの航空写真）



調査前風景



第1トレンチ（西から）



第2トレンチ（東から）



第5 トレンチB（西から）



第5 トレンチB（東から）



第8 トレンチ (南から)



第9 トレンチ (南から)



第11トレンチ（北から）



第11トレンチ（西から）

高井田区画整理事業試掘調査概要報告書

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番55号

電話 (0729) 72-1501 内 440

発行年月日 昭和58年3月

印 刷 K.K 中島弘文堂印刷所

柏原市古文化研究会

